資源共有化研究会

人間文化研究情報

第15回

2020年1月25日（土） 10:10～11:45

日比谷図書文化館　4階 スタジオプラス（小ホール）

◉ 東京メトロ 丸の内線・日比谷線「霞ヶ関駅」B2出口◉ 都営地下鉄 三田線「内幸町駅」A7出口
◉ 東京メトロ 千代田線「霞ヶ関駅」C4出口

参加無料

人文系研究データの生成と管理
「可逆性」の実現のために

■10:00　開場
■10:10　あいさつ・趣旨説明
　・大内英範（人間文化研究機構特任准教授）
■10:15～10:35　講演
　・天野絵里子氏「人文系研究データのライフサイクルを考える」
■10:35～10:55　講演
　・佐々木孝浩氏「日本古典文学研究における「可逆性」とは」
■10:55～11:15　講演
　・高田智和氏「話し言葉調査の「可逆性」」
■11:15～11:45 パネルディスカッション
　・「人文系研究データの生成と管理」司会・関野樹（国際日本文化研究センター教授）
■11:45　閉会あいさつ
　・永村　眞（人間文化研究機構総合情報発信センター情報部門長）

※天野絵里子氏（京都大学・学術研究支援室リサーチ・アドミニストレーター）
※佐々木孝浩氏（慶應義塾大学教授・附属研究所斯道文庫長）
※高田智和氏（国立国語研究所准教授）

研究不正防止を主目的としたガイドラインにより、研究者は研究ノート等の研究データを作成して適切に保管・開示すること、研究機関はそれを研究者にさせることが求められています。しかし、これからは不正を防ぐために保管するだけでなく、研究データを公開・共有して新たな研究資源とすることで、次の研究を生み出すことが期待されています。ただ、人文系の研究の中には、きわめて限られた研究者だけが閲覧を許される写本や、保管自体が難しい音声を一次資料とするものなどがあります。そうした研究では、論文から一次資料に戻ることができる「可逆性」の実現が容易ではないことが考えられます。人文系研究データ生成の際の問題点とはどのようなもので、どのように解決されるべきか、研究データによる「可逆性」の実現をテーマに議論します。

「源氏物語絵屏風」国文学研究資料館所蔵（改変）クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 ライセンス CC BY-SA

《主催》人間文化研究機構総合情報発信センター

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
National Institutes for the Humanities

※事前申込み受付中
（当日受付あり）

【問い合わせ先】大学共同利用機関法人人間文化研究機構 本部事務局センター事務室
情報発信係 Tel 03-6402-9234　Fax 03-6402-9240